
学生の主体性と思考力を育む、カリキュラムと教育方法の検討 ―「東アジアの未来」を素材として

研究代表者 奥野恒久（政策学部）
共同研究者 中田裕子（農学部）
松浦さと子（政策学部）
妻木進吾（経営学部）
田口律男（経済学部）

1. はじめに

学生を、ただ教わる「客体」としてではなく、自分の考えや価値をもって、ときに社会の問題を自身の問題ととらえ、行動できる「主体」として育みたい。そのために大学での教養教育には何ができるのか。どうあるべきなのか。この問いに向き合おうとしたのが、本プロジェクトである。

2021 年度後期に開講されている教養教育特別講義「東アジアの未来」の進行を意識しつつ、本プロジェクトでは 1 回の打ち合わせ会と、5 回の研究会を開催した。それら研究会の概要に触れたうえで、成果と課題について報告する。

2. 2021 年度の活動内容

①2021 年 7 月 7 日 打ち合わせ会（オンライン開催）

メンバーの自己紹介を行ったうえで、本プロジェクトの意図について奥野が説明し、意見交換を行った。

②2021 年 8 月 17 日 第 1 回研究会（オンライン開催）

李洙任「これまでの『東アジアの未来』の授業について」

教養教育特別講義「東アジアの未来」をつくってこられた李先生に、この授業誕生の経緯や TBL（Team Based Learning）なる授業法について説明いただき、質疑・意見交換を行った。報告者はグループを固定し、それぞれに核となる学生を見出し、リーダーシップを発揮させる手法を取ったという。グループワーク中心の授業での学生数など、この手法の課題を共有した。

③2021 年 11 月 8 日 第 2 回研究会（オンライン開催）

平田厚志「旅順監獄における安重根と二人の日本人教誨師」

東アジアの歴史的問題と自らの接点を見出す。そのさいに、本学図書館に現在ある安重根の 4 幅の遺墨が重要な役割を果たす。多くの学生は、伊藤博文を暗殺したテロリストとして安重根をみなしているが、その背景や安重根の思想についてはほとんど知らない。そこで、安重根の遺墨がどのような経緯で本学に渡ってきたのか、その重要な役割を果たした二人の教誨師と安重根との関係について報告者の見解を述べていただき、意見交換を行った。

④2021 年 12 月 21 日 第 3 回研究会（深草紫英館第 1 共同研究室）

松浦さと子「オンライン授業の実践報告」

中田裕子「今年度の『東アジアの未来』の様子」

松浦報告では、パソコンを 2 台駆使して学生の様子を常に見ながら、授業を展開するその手法が紹介された。学生をグループに分けて作業をさせている間の教員の役割や、ビデオをオンにして学生に参加してもらうことの重要性が強調された。

中田報告は、これまでの「東アジアの未来」の授業についてその内容と手法について紹

介した。オンライン授業の進め方をめぐる課題も確認された。

その後、次年度の「東アジアの未来」のシラバスについて意見交換を行った。

④2022 年 2 月 25 日 第 4 回研究会（オンライン開催）

松島泰勝「琉球民族遺骨返還訴訟で何を主張したのか—琉球に関する歴史認識と先住民の遺骨返還権」

社会科学研究所付属安重根東洋平和研究センターと共催で公開での学習・研究会を開催した。来期「東アジアの未来」で一度ご講演いただく松島先生より、ご自身が原告代表として参加している「琉球民族遺骨訴訟」の経緯と植民地主義という問題の構造について提起いただいた。多数の参加者があり、質疑においては植民地主義に対する海外の取組についての紹介もなされた。なお、この研究会の前半にひどい妨害がなされ、Zoom での参加者の管理の難しさを痛感した。

⑤2022 年 3 月 25 日 第 5 回研究会（オンライン開催）

戸塚悦朗「『徴用工問題』とヒューマンライツの国際秩序」

ロシアによるウクライナ侵攻を受けて、第二次世界大戦後に形成された国際秩序が崩壊するのではという問題意識の下、問題を日本に引き付け日韓関係悪化の源泉をたどり、1905 年の日韓協約は存在しない、という報告者の長年の研究成果を開陳した。質疑では、著者の日韓協約無効論がどのように解されているのか、日本の植民地責任を今日においてどのように果たしていくべきかなど、多岐にわたってやり取りがなされた。

3. 本プロジェクトの成果

①2022 年度の授業計画の作成

- 第 1 回 インTRODakション（奥野恒久、中田裕子）：授業の目的、学習方法、TBL
- 第 2 回 20 世紀初頭の東アジア（中田）：帝国主義
- 第 3 回 近代日本のアジア支配（1）—植民地・軍政・大東亜共栄圏（手嶋泰伸）：台湾問題、朝鮮半島支配、憲法施行問題
- 第 4 回 近代日本のアジア支配（2）—植民地・軍政・大東亜共栄圏（手嶋）：松岡外交、対米交渉、大東亜共同宣言、徴用作家
- 第 5 回 安重根と浄土真宗僧侶との関わり—日本仏教と戦争責任（平田厚志）：旅順監獄
- 第 6 回 龍谷大学所蔵コレクションと東アジア—世界最古の地図とモンゴル帝国（村岡倫）：混一疆理歴代国都之図
- 第 7 回 日本近代文学と東アジアの関係—夏目漱石を中心に（田口律男）：安重根、ポストコロニアル、作家とテキスト
- 第 8 回 沖縄の歴史と現在（松島泰勝）：琉球遺骨返還訴訟、米軍基地問題
- 第 9 回 韓国併合と慰安婦・徴用工問題（戸塚悦朗）：国際法規、徴用工裁判
- 第 10 回 靖国問題（奥野）：政教分離、A 級戦犯、靖国訴訟、憲法 20 条
- 第 11 回 ヘイトスピーチ問題（妻木進吾）：新しいレイシズム、ネット、社会学的アプローチ
- 第 12 回 台湾・韓国の市民の発信・表現（松浦さと子）：開かれたチャンネル、多民族放送局
- 第 13 回 日本国憲法の平和主義（奥野）：憲法 9 条、平和的生存権
- 第 14 回 東アジア共同体構想（奥野、中田）：日米同盟基軸論への対抗構想
- 第 15 回 TBL 実践—まとめと討論（奥野、中田）：東アジアの未来への提言

前半では、20 世紀初頭の東アジアと日本の歴史を概観することで、時代状況を確認する。次いで、本学が所蔵する安重根の遺墨と混一疆理歴代国都之図を取り上げ、それを手掛かりに考えることで、学生たちが問題を「自分ごと」として考えることを促す。さらに文学を通じて、当時の日本の東アジアに対する目線について考えを深める。

後半では、沖縄の問題や、徴用工問題、靖国問題、ヘイトスピーチといった東アジアにかかわる今日的な問題につき、歴史的視点と知識を活用して考察する。加えて、台湾や韓国の事例から学び取れることについて考えたい。最終回では、グループに分かれて「東アジアの未来への提言」というテーマで議論してもらい、それを各自のレポート課題に反映させてもらう。

②主体性と思考力を育む

2021 年度の「東アジアの未来」に授業でも、グループ討論の時間をもつことで、他者の意見を聴くとともに自身の意見を述べる、さらには他者とのやり取りの中で自身の考えを深めることを試みてきた。

安重根の遺墨を手掛かりに、当時の安重根のおかれていた状況について考え、グループ討論を行ったあと次のようなレポートがあった。

「植民地支配を日本の過去の汚点だからといって隠すのではなく、遺墨と並びにその歴史についての展示などを行い、たくさんの方にこの歴史を伝えていくべきだと思います。その展示については、植民地支配の歴史や安重根の人物像について、日本か韓国のどちらか一方の立場で紹介をするのではなく、客観的な立場で貴重な資料と共に事実を述べ、この問題をあまり知らない人々に対する問題提起のような形で行うべきだと思います。そのようなことを行い、龍谷大学は安重根の遺墨を保管する日本唯一の大学として、日韓問題についてリーダーシップをとっていくべきだと考えます。」

「実際韓国の学生がどう考えているのか、韓国の学生の視点も知りたいと思った。だから、龍谷大学でこの資料を活用して、日韓の学生が対話する機会を設けるべきだ。現在の日本の歴史教育で習う安重根や植民地に関する情報量は少ないと感じている。そのため、日本社会ではこの歴史に関して深く考えた人は少ないのではないかと思われる。だから、龍谷大学を中心に公開講座やフォーラムを開催し、メディアを活用して日韓の歴史を発信していくべきではないかと考える。」

戦後補償について、ドイツでの対応、例えばフォルクスワーゲンの社長の言葉などを紹介した後のレポートには、次のようなものがあった。

「これこそが本当の補償なのだと感じました。日本と韓国の慰安婦問題が今もなお続いています。少し違和感を感じていたことはお金を払えばそれでいいのかという部分だったのです。私にはお金を払う以外の道はないのかとも思っていました。社長の言葉ではお金が補償の全てではないと語っています。慰安婦問題や日本の水俣病など、国が補償を行ったことは今まで何度もありましたが、本当に重要なことはその先にある誠意なのです。誠意のない補償は償いにはなりません。また同じようなことを繰り返す可能性もあります。そのような最悪の事態を避けるために、犯した過ちをしっかりと認めて、その歴史を隠すのではなく、未来永劫語りついでいくことが大事だと感じました。これらができていない結果が今の日韓関係を作り上げてしまったのでしょう。国交を回復するために、フォルクスワーゲンの社長の言葉を借りると、人と人との交流が、最も重要なのです。」

残念ながら、このような問題について学生たちは考える機会をあまり持ってこなかった。それを正面から取り上げ、正面から論じること自体に意味があるように思われる。私たちのプロジェクトでも、学生間でのグループ討論の意義はあるものと判断する。

4. 今後の課題

①グループ討論への教員の関与

もちろん、学生たちをただグループに分けてテーマを示し、例えば「15 分討論をして、その後で発表してください」というだけでは、なかなか成果は乏しい。「6 人のグループだったが、討論に参加したのは 3 人だけだった」。オンラインでの討論時に、「2 人、オンラインから落ちてしまった」といった指摘もあった。グループ討論の仕方について、例えば、自己紹介などアイスブレイク、役割分担、時間の管理など、事前に一定のレクチャーも必要である。また、グループごとに役割分担や主な意見につきシートにして提出してもらうことは有効であった。

さて、討論時に教員がグループでの議論に立ち入ることには賛否両論があろう。一定の緊張感をもたらす半面、自由な発言を阻害する可能性もある。対面形式であれば、黙って見守るあたりが穏当なように思われる。オンラインでのグループ討論のときも、教員は学生の議論状況を見て回るあたりが適当だろうか。

フィードバックを丁寧に行うことは重要である。グループ討論後の発表の後には、適切なコメントやアドバイスをすべきであるし、授業後のレポートや質問に対しても丁寧に応じる必要があろう。もちろんレポートのなかには、「日本の歴史を批判する『反日教育』に抗議する」といったコメントもあった。このような声に真摯に応じることが重要であろう。教員の負担は大変だが、この作業の積み重ねが学生たちの成長につながると思われる。来年度から、本格的にチェーンレクチャーを展開することからも、このフィードバックには力を入れたい。

②海外の学生との交流

「東アジアの未来」の授業にて、学生たちも現在、日本は近隣諸国と政治的に良好な関係にないことを踏まえたうえで、「国家という枠組みから離れて一人の個人として交流をしたい」という意見が出された。「韓国の音楽やドラマ、映画に関心がある」という学生は多い。「むしろ自分たちの親の世代が、韓国や中国に悪いイメージを持っているのではないか」との指摘もあった。「個人と個人として接したい」というのは、学生たちの素直な思いだと思われる。対面での交流が難しくても、オンラインでの交流の機会をつくることができないか、一つの課題としたい。

③深草・瀬田でのオンライン開講

「東アジアの未来」は、2022 年度から「現代社会の諸問題」の一つとして、深草にてオンラインで開講する。オンライン授業にて、グループ討論も含め順調に進むなら、深草だけにこだわる必要はない。将来的には、瀬田での開講も課題として検討したい。

④国際関係論・国際政治の視点

「東アジアの未来」の担当者に国際関係論・国際政治学の専門家にも加わっていただくことも、一つの課題としたい。

5. おわりに

「龍谷大学は、教養教育が面白い」と言われるような講義を、プロジェクトを通じて生み出したい、との思いから進めてきた。プロジェクト開始時に掲げていた課題は、以下の三つであった。①どのような知識・情報を提供すべきか、その順序はどうあるべきかを検討する。②学生たちには、どのような問題を問いかけるのが適切かを検討する。③ただ一方通行の講義ではなく学生同士が意見交換を行い考えを深めるには、いかなる手法がある

かを検討する。そのさい、オンライン授業を活用することが有益なのか、さらには将来的に深草と瀬田との同時開講も可能なのかも検討する。

①についてはプロジェクトで議論を行い、2022 年度授業計画を作成した。②については、さらなる具体的な議論が求められよう。③についても、さらに実践を通じて検討していくことが求められている。

今年度、コロナウイルスの感染拡大がやまないなか、ほとんどがオンラインでの研究会となったため、十分な交流ができなかったのが残念であった。